17. 明治後期以降の京浜電気鉄道開設の羽田運動場に関する設置基本構想および整備、運営内容の分析

- 関東地方における総合運動場初期成立事例に関する検討 -

The Analysis of Basic Establishment Concept, Maintenance and Operation Contents about Haneda Athletic Ground Established by Keihin Electric Railway After the Late Meiji Period

- Study on the Initial Establishment Case of General Athletic Ground in Kanto Region

馬場 信行*
Baba Nobuyuki*

This paper deals with Haneda Athletic Ground that Keihin Electric Railway and Japanese Exercise Association opened in the late Meiji period. It aims at the determination of its social position to analyze the basic establishment Maintenance and Operation Contents of the Haneda Athletic Ground. Most of the athletic grounds were located in schools, and there were few open and general athletic grounds at that time. But Haneda Athletic Ground was opened not only to some elite students but also to the general public such as workers. Haneda Athletic Ground provided opportunities for watching sports competitions and holding corporate athletic events by using means such as the construction of several stands.

Keywords: General Athletic Ground, Haneda, Keihin Electric Railway, Railway Line Development, Watching Sports
総合運動場, 羽田, 京浜電気鉄道, 沿線開発, スポーツ観戦

1. 背景と目的

明治中期は、第一高等学校を中心に野球試合がおこなわれていた。明治後期になると、第一高等学校に代わり、早稲田大学や慶應義塾大学などの私立大学を中心に、地方の中学校や商業学校にも野球が普及拡大していった¹⁾。

野球の他にも、外国人教師の紹介等を通して、明治後期には国内でもテニスや陸上競技等が大学生を中心に認知され始め、競技人口が増えると、専用の運動場が求められるようになった。次ページに掲げる表-1 のとおり、1902(明治35)年に早稲田大学野球部による戸塚球場が開設されると、翌年には慶應義塾大学も三田綱町球場を開設し、早慶野球戦が始まる²⁾。これらの球場が以前に比べ、試合を鑑賞するための観覧席が設置されていた点が画期的であった。

早慶野球戦の気持は過熱し、スポーツ観戦が国内で広がりを見せていくなか、明治後期に国内各地で路線を延伸していった鉄道会社が沿線開発の一環として、運動場を開設した^{3,4)}。関東地方では、本論で扱う京浜電気鉄道(以降「京浜電鉄」と記す。本論では旧字体で表示される漢字は原則新字体で記す)による羽田運動場や、玉川電気鉄道による玉川運動場が1909(明治42)年に開設された。

他方、関西地方では、1910(明治43)の阪神電気鉄道の香櫨園運動場や京阪電気鉄道の香里運動場を嚆矢として、大正初期には箕面有馬電気鉄道の豊中グラウンド、阪神電気鉄道の鳴尾球場等が建設された。これらの運動場では、大阪毎日新聞や大阪朝日新聞等と連携して、中学・専門学校・大学の野球大会や陸上競技会が開催された⁵⁾。

1909(明治42)年に京浜電鉄にとって、会社創設以降初めての大規模土地の沿線開発事例として、羽田運動場が開設された。京浜電鉄各年史では、乗客誘致のために運動場を設置したと記されているが⁶⁾、乗客誘致以外の設置目的、

施設配置詳細、運営内容や期間などについて記されていないため、当時の社会状況における役割が不明確である。

そこで、本論では、羽田運動場の基本構想に具体的に關わった設置者の言説や行動を分析することで、乗客誘致以外の設置目的を明らかにする。また、設置詳細資料が乏しいため、地形図や当時の絵はがきから整備内容を推定する。加えて新聞や雑誌記事を参照し、羽田運動場で開催された競技内容を分析することで運営内容を解明し、設置者の目的がどの程度実現されたかを確認することで、羽田運動場が当時どのような意義を担っていたか、その社会的位置づけを図るのが本論の目的である。

2. 研究方法

(1) 用語の定義

本論において、「総合運動場」は、「単一の野球場やテニスコートではなく、複数のスポーツ競技が同時にできる運動場」のことを指す。また、「設置」は「施設の新設や改善をおこなうこと」、「設置者」は「直接所有していないが施設の新設や改善に関する基本構想をおこなう人」を指す。

(2) 既往研究の整理と本論の位置づけ

運動場に関する研究は複数あり、そのなかで本論の観点にとりわけ近接した研究を整理する。

まずは、戦前に国内の鉄道会社が開設した野球場を網羅的にまとめた坂井の研究がある⁴⁾。公営の野球場がほぼ存在しなかった明治後期以降、鉄道会社によって旅客収入を上げるために設置された「電鉄会社系野球場」の社会的意義を坂井は評価する。電鉄会社系野球場は時代ごとに第Ⅰ期から第Ⅳ期まで区分され、羽田運動場は全国中等学校優勝野球大会が開かれる1915(大正4)年までの第Ⅰ期の事例に分類される。倶楽部野球だけでなく1911(明治44)年にス

*学生会員 東京工業大学社会理工学研究科(Graduate School of Decision Science and Technology Tokyo Institute of Technology)

表-1 羽田運動場関連年表⁽¹⁾

年次	羽田運動場に関する主要事項 (海水浴等水泳に関する事項除く)	京浜電鉄による鉄道延伸および 運動場以外の沿線開発事例 (海水浴場含む)	国内他地域の主な運動場及び野球場開発事例(下線で表示、 【】内は設置主体)、ならびに、スポーツに関する主な出来事
1902 (明治35)年		(6/28) 羽田支線蒲田・穴守(初代)間開通【a】 (9/1) 六郷橋・川崎間開通【a】	(10月) 戸塚球場【早稲田大学】
1903 (明治36)年			(不明) 三田綱町球場【慶應義塾大学】 (11/21) 三田綱町球場で早慶(野球)戦が始まる
1904 (明治37)年		(5/8) 品川・川崎間全通【a】	
1905 (明治38)年		(12/24) 川崎・神奈川間開通 (浜浜区間全通)【a】	(4/4~6/29) 早稲田大学野球部、初めての米国遠征
1906 (明治39)年			(秋頃) 応援合戦等の過熱で早慶(野球)戦中止
1907 (明治40)年			(10/31) 慶應義塾大学野球部の招聘で、ハワイのセミプロ連合チーム「セントルイス」来日し野球試合実施。観客から入場料を徴収した国内初事例
1908 (明治41)年	(1/1) 雑誌『冒険世界』で、京浜電鉄による羽田運動場設立計画が発表される【j1-1-108】	(月次不明) 京浜広告社と広告請負契約締結、鉄道広告営業開始【b】	(9/6) 早稲田大学の招聘で、米国ワシントン大学野球チーム来日し、野球試合おこなう
1909 (明治42)年	(4/3) 羽田運動場開場、東京倶楽部対神戸倶楽部の野球対抗戦開催【i14-105】 (6/1) 一定年限の間、社団法人日本運動倶楽部が羽田運動場を運営すると発表される【i15-140】	(7月) 大森八幡海水浴場開設【a】	(11月頃) 玉川運動場【玉川電気鉄道】
1910 (明治43)年	(3/30-4/1) 都下中学野球競技大会開催【i24-56】	(1/1) 遅塚麗水著『京濱遊覧案内』発行【a52】	(不明) 香榎園運動場【阪神電気鉄道】(大毎新聞協力) (不明) 香里運動場【京阪電気鉄道】 (9/24) 雑誌『冒険世界』主催で上野不忍池畔で全国学生大競走会開催。陸上競技各種目が行われる (11月) 柏木グラウンド【明治大学】
1911 (明治44)年	(7/19) 中等学校連合野球大会開催【g55】 (7/26) 台風による高潮被害により、運動場のスタンドと建物が押し流される【f】【j4-12-115】 (11/18-11/19) ストックホルム五輪大会予選競技会開催【f】	(7/5) 羽田海水浴場開設【a】	(8/20) 東京朝日新聞による特集記事「野球界の諸問題」に端を発し、言論界にて野球害毒論争起こる
1912 (明治45)年 (大正元)年	(11/10) 六六倶楽部野球優勝大会。全国自転車大競走会【e】	(7月) 羽田運動場内に一万坪のプール設置 (大正2年設置の可能性もあり)【d464】 (不明) 羽田運動場内に遊園設備設置【a53】	
1913 (大正2)年		(12/31) 羽田支線、穴守稻荷神社直近位置まで延伸【a】	(不明) 豊中グラウンド【箕面有馬電気軌道】(野球場併設)
1914 (大正3)年	(11/16) 押川春浪、脳膜炎により死去【f】 (不明) 中澤臨川、京浜電鉄を退社【e】	(5/1) 会社初の分譲住宅地として生麦住宅地販売開始【a】	
1915 (大正4)年			(8/18) 第1回全国中等学校優勝野球大会(後の全国高等学校野球選手権大会)、豊中グラウンド開催
1916 (大正5)年	(5/8) 全国連合自転車大会開催【f】		(不明) 鳴尾球場【阪神電気鉄道】(陸上競技場、テニスコート併設)
1921 (大正10)年			(不明) 芝浦球場【日本運動協会】(テニスコート併設)
1922 (大正11)年		(6/1) 川崎運河工場地住宅地販売開始【a】	(4/21) 京阪グラウンド【京阪電気鉄道】(後に野球場、テニスコートも併設) (6/15) 宝塚球場【阪神急行電鉄(現: 阪急電鉄)】(陸上競技場としても使用)
1923 (大正12)年	(9/1) 関東大震災により、羽田運動場護岸等施設被害を受ける【a66-67】		(5/23頃) 大阪市立運動場【大阪市】(27,000席スタンド) (6/15) 甲子園大運動場【阪神電気鉄道】(陸上競技場としても使用。設計者は野田誠三(社内))
1924 (大正13)年			(10/25) 明治神宮外苑競技場【明治神宮】(翌年、野球場も併設。設計者は明治神宮造営局技師小林政一)
1925 (大正14)年			(10/19) 早慶(野球)戦復活
1926 (大正15)年 (昭和元)年	(7/18) 東京中学校リーグ選抜軍対横浜中学校リーグ選抜軍の野球試合開催(野球試合再開)【e】 (9/24) 第五回少年蹴球大会開催【e】 (10/24) 瓦斯電気関東地方組合会京浜協議会、羽田グラウンドで運動会開催(確認できる最後の羽田運動場における催事)【f】		(6月) 新田運動場【慶應義塾大学】(野球場、陸上競技場、蹴球場併設)
1932 (昭和7)年		(7月) 羽田運動場に海の家とプール開設【b135】	
1938 (昭和13)年	(2/7) 羽田運動場用地を東京飛行場拡張用地として通信省に売却【b】		

【】内は典拠資料、数字は根拠ページ(数字記載ないものは各資料の年表を根拠とする) 【a】『京浜電気鉄道沿革史』(1949) 【b】『京浜急行八十年史』(1980)

【c】『羽田町勢提要』(1932) 【d】『羽田郷土誌』(1954) 【e】『東京朝日新聞』【f】『読売新聞』【g】『報知七十年』【i】『運動世界』【j】『冒険世界』

注記: 【i】において、ハイフン左側は号数、右側はページ数、【j】はハイフン左側が巻数、中央が号数、右がページ数を指す

ストックホルム五輪予選会が開かれたことへの言及もあるが、それ以上の詳細について記載がない。

次に、西原の研究では、東京と大阪を中心にした新聞社と鉄道会社の連携によるスポーツイベント展開過程に着眼している⁵⁾。新聞社別に当時開かれたスポーツイベントを参照し、明治後期から大正期に野球が精神主義的、勝利至上的なものに変容したとの通説を否定し、当該時期に関西地方を中心に野球は娯楽色の強い大衆文化として受容され、定着した可能性を示唆する。大衆文化としてのスポーツ受容の契機として当該時期に成立した運動場が寄与したという視点は本論に近い。ただし、羽田運動場は関東私鉄会社によるスポーツ施設の初期整備事例と位置づけられる一方で、新聞社との本格的な連携はなく、明確な企業的意図で

建設されたのか不明点が多いと西原は言及し、それ以上の詳細について触れていない。

1913(大正 2)年の箕面有馬電気軌道による豊中グラウンド開設に至る背景や、開設後の改修計画に焦点を当てた正木の研究は、最初期の鉄道会社による運動場の個別要素に注目している³⁾。正木は、新聞記事と阪急文化財団所蔵の平面図や古写真を基に、施設配置の詳細を検証し、大規模スポーツイベントの開催に合わせて実施された観覧席の改修に着目する。選手が使用する競技空間だけでなく、観客が滞在する「観覧空間」の整備によって、運動場が「観戦する娯楽」の体験を提供していたと指摘する。施設配置から整備内容を読み解く点、観覧施設を重視するなど本論と共通する点が多い。これに対し本論は、正木の手法を参考

にしながら、同研究ではあまり触れられていない開催競技内容や設置者言説を併せて検証する点で、正木の指摘する「観戦する娯楽」の背後にある設置目的や、開設後の運営内容詳細を分析する点で独自性がある。

(3) 研究手法および構成

本論の研究は、主として文献調査、詳しくは表-2の主要参考文献表内にある記載書誌の分析に基づく。なお、表-2において、「新聞誌」「雑誌」は本論における参照年を表す。

表-2 主要参考文献表

文献種別	発行(参照)年	書誌名	著編者
京浜電鉄社史	1949	『京浜電気鉄道沿革史』	京浜急行電鉄
	1980	『京浜急行八十年史』	京浜急行電鉄
	2008	『京急グループ110年史』	京浜急行電鉄
体育史	1936	『大日本体育協会史 上巻』	大日本体育協会
新聞誌	1908～1938	『東京朝日新聞』	朝日新聞社
	1908～1938	『読売新聞』	読売新聞東京本社
	1910	『横浜貿易新報』	横浜貿易新報社
新聞集成	1941	『報知七十年』	報知新聞社
雑誌	1908～1914	『運動世界』	運動世界社
	1908～1919	『冒険世界』	博文館
	1912～1923	『武俠世界』	武俠世界社
	1908～1911	『月刊ベースボール』	野球研究会

なかでも『運動世界』は、当時早稲田大学野球部部長を務めていた安部磯雄を主幹とし、同大野球部OBが主に執筆をしたスポーツ専門誌で、1908(明治41)年から1913(大正2)年まで発行された。『運動世界』編集者の多くは、羽田運動場設置を京浜電鉄に働きかけた早稲田野球部か庭球部のOBであり、同編集部の記載は次章で触れる通り、設置者による発表としての意味合いがあった。同じく『冒険世界』は、日本運動倶楽部の理事として羽田運動場基本構想を担った設置者の押川春浪(本名：方存)が、創刊時の1908(明治41)年から1911(明治44)年まで編集長の立場にあり、基本は冒険小説を扱う雑誌であったが、野球や相撲等のスポーツに関する記事が多く掲載され、羽田運動場に関する事象について、読者へ伝える役割を担っていた⁸⁾。

また、文献資料を補うものとして、羽田運動場周辺地形図や絵はがき写真を用い、雑誌や新聞記事との照合をおこなう。1922(大正11)年測図の1万分の1「穴守」地形図が、羽田運動場開設以降運動場敷地の地割詳細が掲載された2万分の1以上の都市部詳細地形図のうちもっとも古いものである。1922(大正11)年のものだと開設当初から施設が変化している可能性は高いが、1916(大正5)年修正測図5万分の1「東京東南部」地形図で確認できる埋立地外形は上述の大正11年測図のものと一致し、運動場敷地外形は1909(明治42)年頃におこなわれた埋立以降も大きく変化していないため、参照資料として引用した。

3章で設置者の基本構想を分析し、乗客誘致以外の羽田運動場開設目的を解明する。次に、4章では整備内容、5章では運営内容を分析することで3章の基本構想の目的にかなう状態が実現されていたのかを検証する。各章の分析を受け、6章で羽田運動場の社会的位置づけを図る。

3. 羽田運動場の基本構想

(1) 建設計画時点の基本構想概要

京浜電鉄の後継会社である京浜急行電鉄は、1949(昭和

24)年に編纂した『京浜電気鉄道沿革史』で、郊外交通機関を発展させていくために、沿線開発は必要不可欠のものとの認識を示す⁹⁾。そして、会社として「種々の計画を樹てた」うちの一環として、羽田に「方五町の大運動場」を設置し、乗客誘致を図ったと総括した。各年代の京浜電鉄社史でこれ以上詳しい言及は見当たらず、設置経緯に関する詳細事項について本章で明らかにする。

運動場開場1年3か月前の1908(明治41)年1月発行の雑誌『冒険世界』第1巻第1号で、羽田に「大競技場」を建設する計画が発表される⁹⁾。前年誕生した京浜アマチュア倶楽部チームリーグ専用競技場にしてくれるなら、「羽田の海岸を距る数町」の土地を京浜電鉄が整地をしたうえで同リーグに寄付するとの発言が同記事で引用される。また、京浜電鉄の中澤臨川(本名：重雄)が京浜電鉄重役およびアマチュア倶楽部へ交渉中とある¹⁰⁾。

同年4月発行の雑誌『運動世界』第1号に羽田運動場設置構想に関する記事が登場し、京浜電鉄が羽田に約一万坪の大運動場を設置し、『運動世界』編集部に関与する野球と庭球のリーグに寄附したとある¹⁰⁾。同記事では、「郊外運動場の必要は東京の如き都会に於ては殊に然る」状況において、「京浜鉄道の此挙は時代の要求を充たすべき最適なる処置」と評価したうえで、当該計画にあたり早稲田大学野球部OBである押川春浪の尽力があったと記されている。

1909(明治42)年2月発行の『運動世界』第11号では、運動会場及び野球競技場一箇所、小規模野球競技場二箇所、テニスコート数箇所を設け、同年4月竣工後も大弓場や水泳場設置計画があると、施設内容について発表された¹¹⁾。

設置当時者側以外の資料として、1908(明治41)年12月27日及び30日付の東京朝日新聞記事で、京浜電鉄による羽田海岸地約一万坪の「大運動場」整備計画が報じられる¹²⁾。同記事によると、「帝都に共通の大運動場なきは一の欠点」と認識したうえで、京浜電鉄が経営し、京浜電鉄技師長中澤臨川と雑誌『冒険世界』主筆押川春浪の二人も加えた「創立委員会」により工事が進捗中と記されている。

(2) 基本構想詳細と目的

1909(明治42)年2月の羽田運動場開場前に、自らが編集長を務める『冒険世界』で、設置者である押川春浪は「日本大運動競技場設立に就て」と題し、羽田運動場開設に関する運動場設置目的に関する記事を公表した¹³⁾。従来国内には「理想的公開運動場」がなく、「壮快有益な」運動場を造ることを最良の策としている。

開場後に発足した社団法人日本運動倶楽部(以下「日運俱」と記す)の定款内容によると、京浜電鉄が日運俱に運動場の土地と設備を提供し、「一定年限間の土地使用権及運動場の設備」から生じる収益は日運俱に資することが定められている¹⁴⁾。定款第一条で日運俱の目的は、「種々の運動競技を開催して国民の体育を奨励」「完備せる運動競技場を設け学校団体及個人の利便に供する」と定め、第二十四条で役員は全員名誉職とし、一般市民に「体育」環境を提供する公益団体としての日運俱の存在が強調されている。

日運俱の会頭には東京市長尾崎行雄、副会頭には東京商業学校校長の和田垣謙三が就任し、『運動世界』の主幹を務める安部磯雄が理事となった。以降の『運動世界』での記述を見ると、押川春浪、当時京浜電鉄技師長を務めていた中澤臨川、早稲田大学体育会 OB であり『運動世界』主筆の水谷竹紫、同体育会 OB の田村三治、慶応大学野球部 OB の鷺澤與四二の五人で構成される理事が羽田運動場運営の実務を担い、押川と中澤の二人が日運俱において重きを為しており、1908(明治41)年12月にこの両名が羽田運動場開設にあたり、日運俱定款の起草等をおこなった¹⁵⁾。

(3) 小括

以上各節で、京浜電鉄の乗客誘致への思惑とは別に、政界や学界の後ろ盾を得ながら、早稲田大学や慶應大学体育会 OB によって構成された日運俱は、学校や倶楽部チーム所属者だけに留まらず、一般市民へのスポーツ、体育振興に関する機会提供を設置目的に掲げていたことが判明した。

図-1 羽田運動場平面図³⁾

図上各施設を示す色付き字は筆者にて加筆。紫字は本論で実在が確認できた施設、青字は位置が異なるが実在した施設、赤字は資料から実在が確認できない施設。図上の長さは間数で1間は約1.81m

図-2 羽田運動場周辺地形図⁴⁾

色塗部分と色線部分は筆者にて加筆。青塗部分は京浜電鉄所有推定地全域、赤塗部分は図-1の平面図を基にした同スケールの方角を推定配置し、黄塗部分(赤塗部分重複)は野球場全体、緑線が図-1内園路を推定配置したもの。紫破線内は1911(明治44)年五輪予選競技会用トラックおよび観覧席設置推定位置を示す

4. 羽田運動場の整備内容

(1) 開場直後の施設配置

1909(明治42)年4月1日発行の『運動世界』13号で、運動場は大至急工事仕上げにかかり、4月3日、神戸倶楽部対東京倶楽部の野球試合をもって開場と告知される¹⁶⁾。同号では、羽田運動場の「設計図」と題した、図-1平面図が開示された。図-1に加え、大正11年の地形図を基にした図-2で示す地形図、図-3で示す遠景写真に加え、『運動世界』の記述を基に本章では施設配置詳細を明らかにする。

図-1は簡易図であり方位や縮尺はないが、「総坪数一万三千坪」とあるところから、同図内の間を単位にした長さを基に、図-1で示された運動場と同じ大きさの方角を、図-2地形図の赤塗部分で推定配置した。図-2で確認できる園路の方角を踏まえると、運動場は地形地盤と概ね平行に整地したと推定され、正門から北門に向けての方角は、実際の北から東向きに8度程度ずれている可能性が高い。北門、西門、東門の位置は、実際の東西南北の方向から8度ずれの可能性はあるものの、その名の通り概ね各方位に近い向きを持っており、東西北門は陸路では移動手段がなく、唯一穴守稲荷神社門前町や穴守駅に通じる園路のある南側の門が正門である可能性が高い。また、正門を、図-2地形図で確認できる道路上で京浜電鉄所有地に接する位置から、敷地東南端に直線を伸ばすと、堤防まで約70間の長さがある。当該道路が明治42年に作られたものと仮定すると、正門の位置と野球場の広さが京浜電鉄所有地に一致することから、図-1平面図に基づき運動場が建設され、図-2で示した推定位置に近い配置が為された蓋然性は高いと言える。

1909(明治42)年4月時点では野球場が竣工したのみで、同年6月発行の『運動世界』通巻15号では、各種団体の運動会場にふさわしい施設、図-1に明記された花園、他に大浴場の設置計画が示される¹⁴⁾。1910(明治43)年5月に、日運俱の理事兼『運動世界』の編集者水谷竹紫は、野球場グラウンドが砂地で固まらないことを問題にし、全面に赤土を盛り早慶の球場と同等の硬度を保ち、観客の便を図るために観覧席増設計画を明らかにした¹⁷⁾。同年9月にも、『運動世界』編集室から約二万円の建設費で、当初予定通りの各競技場を作り今秋中には完成予定とされたが、2年経過した1911(明治44)年4月発行の『運動世界』にも運動場に数万円を投げ設備を完全にするとの記載があることから、図-1平面図どおりの施設完成は困難であったことが推定できる¹⁸⁾¹⁹⁾。その後、未完成部分計画に触れる記事はなくなり、完成を確認できる記述は確認できない。

しかし、羽田運動場の宣伝意図も込めて発行された図-3の絵はがき写真等をもって、運動場全体像の類推は可能である。図-3手前に見えるゲートが、図-1平面図で示された南側正門と考えられる。図-3一部を拡大した図-4の野球場写真ではバックネットと観覧席が二箇所確認できる。また、図-5野球場写真バックネットの背後に観覧台が設置され、図-4でも同様の観覧台が確認できる。これらの資料から、羽田運動場は相当数の観覧客来場を想定して設置された。

図-3 羽田運動場遠景写真⁽⁵⁾
筆者にて青字部分加筆および写真の彩度を改編

図-4 羽田運動場野球場拡大写真⁽⁶⁾

図-5 羽田運動場野球場
観覧台写真⁽⁷⁾

図-6 羽田運動場テニス
コート拡大写真⁽⁸⁾

そして、正門から延びる園路を挟んで、図-3 中央左側がテニスコートにあたり、図-3 を拡大した図-6 のテニスコート写真では、テニスネットと思われる設備と、テニスコート側に向けた小規模の観覧席が確認でき、これも観覧を想定していた施設と考えられる。それに加え、図-4 および図-6 手前部分で確認できる樹木は、図-2 地形図の地図記号で針葉樹林と表現されているものにあたり、写真上外形より松である可能性が高い。傍証として、前章でも引用した、運動場開場前の 1908(明治 41)年 1 月発行『冒険世界』記事内に、運動場敷地には「繞らすに松林を以てし、西にしては富士を望み」との中澤臨川の談話がある⁹⁾。図-4、図-6 で確認できる松林は、二方向が海に面した羽田運動場の各施設を囲む防風、防潮林であり、境界の役割だけでなく、施設の美観を考慮に入れて植樹された可能性がある。

また、図-1 平面図配置からすると、図-4 の左奥側、また図-5 観覧台の奥に確認できる建物が事務所にあたる施設と推定される。また、この図-3 が撮影された角度からすると、完成しているなら写っているはずの、図-1 上のコーヒードヤや花園は、写真が撮影された段階では未完成、あるいは、このまま建設されなかった可能性が高い。以上、実在が確認できた施設は図-1 において紫字、青字で明記し、確認できなかった施設は赤字で表記した。前述文献資料にもあるとおり、当初計画施設が完全に実現した可能性は低いものの、野球場やテニスコートの主要施設の建設は確認できた。

(3) 明治 44 年五輪予選会以降の施設配置

1911(明治 44)年、日本選手初参加となったストックホルム五輪予選競技会が 11 月 18 日、19 日の両日に羽田運動場で開催された。同年 7 月に創立した大日本体育協会(以後「大体協」と記す)協会史によると、京浜電鉄と交渉の結果、以降の毎年競技会開催を条件に、従来自転車練習場と

して使用していた「海辺寄りの平坦地」に陸上競技場が新設されることになった²⁰⁾。

大体協理事の大森兵蔵は、『運動世界』に五輪に関する記事を数度投稿したが、当該記事によると新設陸上競技場は、野球場と道を隔てた反対の側にあったと記されている²¹⁾。できるだけ海外の五輪競技場に則った、一周 400m のトラックを設置し、走路部分には粘土と砂とを混合したものに、にがりやを撒くなどスパイクにも対応した競争者指向の整備をおこなった。また同記事には当該競技場に関する「設計の費用約二千円」との記載はあるが、これが現代で言う設計に要した費用のみを指すのか、設計費を含んだ建設費用全部を指すのかを明記する資料は管見では見当たらない²¹⁾。

予選会の内容を報じた『運動世界』の記事によると、京浜電鉄がトラック設置に多大な尽力を為したとあり、前述した「設計の費用」を負担していた可能性がある²²⁾。また、同記事では、野球グラウンドの西側にトラックを設置したとあり、同雑誌他記者も予選会場を「東に廻って野球場の方に散歩に」という表現をしている²³⁾。ここで設置された予選会場トラックの周囲には数千人を収容できる観覧席が建設されたとの記載もあり、図-7 で示した『運動世界』の写真記事からも、多くの観客が観覧台から競技を見守っている様子が確認できる^{22,24)}。

(4) 小括

以上各節のとおり、少なくとも明治後期における羽田運動場は、大規模埋立地の広さを活かし、野球場、陸上競技場、それぞれに数千人収容できるスタンドを備えていた。従来は早稲田や慶應大学などの私立大学にしかなかった観覧施設の設置によって、多くの観客がスポーツ競技を観戦できる環境が整った。

こうした環境整備により、次章で述べる一般客が多数来場できるようなスポーツ競技が開催できるようになった。

5. 羽田運動場の運営内容

(1) 一般客来場時の開催競技内容一覧表

次ページに掲げた表-3 は、表-2 の参考文献表で掲げた新聞や雑誌記事で羽田運動場開催が確認でき、一般客が来場した競技内容一覧である。主催者が判明しているものについては、その旨を表示している。会場の様子について新聞、雑誌記事で記述があるものは、表-3 内の太字で示す。

その他、開催競技内容もしくは開催頻度に変化が見られる部分に注目し、1909(明治 42)年 4 月から 1911(明治 44)年 7 月までを「野球場主要期」、1911(明治 44)年 8 月から

図-7 羽田運動場五輪予選競技会の様子⁽⁹⁾

1913(大正2)年3月までを「野球場・陸上競技場併用期」、1916(大正5)年7月から1926(大正15)年10月までを「詳細不明期」と区分する。次節では表-3の記載内容に沿って、開催競技の変遷について分析する。

(2) 一般客来場時の開催競技変遷

前章1節で触れたとおり、野球場竣工をもって開場としたこともあり、「野球場主要期」は、野球試合が大多数を占めており、大学OBを主要メンバーとする倶楽部チームの試合が多く組まれている。なかでも、表-3の4、6、13-17、25、26番で試合をおこない、17、19番では試合主催者でもある天狗倶楽部とは、日運俱のメンバーで運動場設置者でもある押川、中澤らと早稲田大学野球部、庭球部OB等によって結成された社交団体である²⁵⁾²⁶⁾。

「野球場主要期」において、これら倶楽部チーム戦は多くの観客を集めていたことが、表-3の太字で示した各雑誌や新聞記事の情報から確認できる。また、図-5写真に映る多くの観衆は、表-3の3番、東京倶楽部対慶應大学の試合を観戦している。東京倶楽部は早稲田大学野球部OBが大半で、観衆は当時応援の過熱で中止とされていた、早慶戦に準じた試合として多くの耳目を集めていた²⁷⁾。

このように、1909(明治42)年4月の開場以来、1911(明治44)年7月まで野球試合が日曜日中心におこなわれたが、表-1年表でも示したとおり、同年7月26日の台風高潮によって羽田運動場の観覧席と建物が押し流されたことを、日運俱を事実上代表する押川自身が編集する雑誌上の記事で報告している²⁸⁾²⁹⁾。この観覧席と建物が野球場との記載はないが、過去二年間の野球試合の頻度と、表-3において台風後は、30番の1912(明治45)年3月まで野球試合がおこなわれた記録が見当たらないことから、野球場の損害が甚大で復旧までに時間を要したことが推定できる。

台風損害後の1911(明治44)年7月から1913(大正2)年3月の「野球場・陸上競技場併用期」は、野球場を使用しない陸上競技や自転車競走大会が加わっている。ただし、「野球場主要期」に比べると多くの観客が集まるイベントの開催頻度は下がり、大体協による主催で多くの耳目を集めた表-3の29番オリンピック予選競技会を除くと、雑誌や新聞等で多くの人で賑わう描写も確認できなくなる。

日運俱や天狗倶楽部、雑誌『武侠世界』を発行する武侠世界社で「野球場・陸上競技場併用期」の野球大会や模型飛行機大会を主催していた押川春浪が1914(大正3)年11月に病死し、同年に中澤臨川が京浜電鉄を退社し東京を離れている³⁰⁾³¹⁾。押川と中澤以外にも日運俱や武侠世界社に後継者がいた可能性はあるが、以降倶楽部チーム戦や中学野球大会は早稲田大の戸塚球場での開催が多くなり、羽田運動場での野球試合開催の記述は確認できない。京浜電鉄の各年史にもオリンピック予選会以降の羽田運動場運営に関する明確な記載はないが、同じ運動場内にある海水浴場の広告を新聞上に出すようになったのが1914(大正3)年以降で、京浜電鉄が野球場、陸上競技場から海水浴場の施設整備の重点をシフトさせた可能性も考えられる³²⁾。

とはいえ、1916(大正5)年以降の「詳細不明期」は資料の確認ができない時期で不明点が多いが、自転車競走大会の開催が断続的におこなわれており、自転車競技用の施設があった可能性は高い。そして、1926(大正15)年7月に再び野球試合がおこなわれ、朝日新聞記事によると「十五年ぶりに」羽田運動場が復活したとある³³⁾。表-3の36番での試合がある通り、十五年ぶりは誤りであるが、この記述から久しく自転車競走大会以外でグラウンドが使用されていない蓋然性が高い。その後、表-3の42番の蹴球大会以降1938(昭和13)年2月に羽田運動場敷地が東京飛行場拡張用地として売却されるまで、再びスポーツイベント開催は確認できなくなる⁷⁾。

以上概観すると、羽田運動場が競技施設を保ちながら、大規模な競技が開催されていたのは、「野球場主要期」と野球場・陸上競技場併用期、1909(明治42)年4月から1913(大正2)年3月までの4年間であった可能性が高い。

(3) 一般客来場時以外の法人運動会の内容

羽田運動場は一般客来場時以外にも、法人への施設貸出を実施した。表-4は、羽田運動場における法人運動会の日付と開催団体、参加人数と詳細が確認できる新聞記事を抽出したものである。具体事例として、表-4の4番と図-8に掲げた横浜電線製造の秋季運動会の様子を取り上げる。新聞記事によると、同社常務取締役の銅像除幕式を横浜市内「楼上」でおこなった後、「六百の男女職工」は羽田運動場へ移動し、秋季運動会に参加した。図-8の通り、職工と見られる男性たちが徒競走を実施している様子が確認できる。

表-4で見る通り、こうした法人運動会の内容は競技よりも余興が多く、工員の慰安としての側面が大きい。しかし、各会おおよそ数千人規模の労働者層、とりわけ女子工員が受動的な契機ではあるものの、運動場を利用していたことが確認でき、その意味でも羽田運動場は大学スポーツOB以外の社会主体に向けて開かれていた時期があった。

新聞記事以外の記録がなく、報じられていない法人運動会が他にもあった可能性もあるが、表-4で確認できた5つの事例はすべて「野球場主要期」にあり、次節で述べる管理体制が整っていた時期と重なる点も指摘しておきたい。

(4) 運動場の管理体制

1909(明治42)年12月に、早稲田大学野球部OBである獅子内謹一郎が京浜電鉄に入社し、羽田運動場管理の職務にあたるのが雑誌『運動世界』誌上で発表された³⁴⁾。一般貸与向けに日運俱で野球器具を購入し、野球器具の貸与を受けたいと希望した読者に対して、『運動世界』編集部は「京浜電鉄の獅子内氏」に問い合わせるよう回答した³⁵⁾。獅子

図-8 羽田運動場での横浜電線製造(株)秋季運動会¹⁰⁾

表-3 羽田運動場における一般客来場時の開催競技内容一覧表

時期	番号	日付	曜日	開催競技	競技主催者	競技詳細、入場料有無、ならびに、会場の様子 (会場の様子は出典を明示した太字で表示。入場料有無に関し、明記あるものは太字と下線で表示)	出典
野球場 主要期	1	M42.4.4	日	野球	(不明)	東京俱対神戸俱/当初3日(土)を予定したが当日雨天で順延、4日と5日(月)開催(計3試合)/羽田運動場の開場式開かれる/ 入場無料 /三越呉服店が優勝旗を寄贈/ 「両側のスタンドから外野の方へ翼を張った様に人でもって埋まり」 【運】	読・朝・運
	2	M42.4.18	日	野球	(不明)	東京俱対早大/京浜電鉄は臨時列車を運行、電車賃の割引も行う/閉会時に京浜電鉄重役「内田氏」(当時の常務取締役内野五郎三のこと)の令嬢二人による花輪と花束贈呈	朝・運・冒
	3	M42.4.25	日	野球	(不明)	東京俱対慶大/ 「約一万の観客」 【運】	運
	4	M42.5.30	日	野球	(不明)	早大対米艦クラブランド選抜軍/天狗俱対やまと新聞チーム	運
	5	M42.6.6	日	野球	(不明)	伊勢清呉服店員対三井銀行員	運
	6	M42.8.15	日	野球	(不明)	天狗俱対横浜俱(午前横浜公園で試合後移動して、午後羽田で試合)/天狗俱対三田俱	べ
	7	M42.8.29	日	野球	(不明)	三田俱対横浜外人チーム/三田俱対水戸俱等	べ
	8	M42.12.19	日	野球	稲門俱	稲門俱対早大試合および本年の解散式開催	読
	9	M43.2.6	日	相撲	(不明)	羽田新設土俵で、横綱俱(慶大生とOB)対天狗俱の相撲試合/ 「スタンドは勿論土俵の廻りは黒山の様に見物」 【読】/ 「土俵の周囲は早くも身動きもならぬ混雑」 【運】	読・運・冒
	10	M43.2.27	日	野球	(不明)	稲門俱対横浜俱の試合	読・運
	11	M43.3.30	水	野球	東京運動記者俱	都下中学野球競技大会/30日から翌月1日(金)までの3日間	読・朝・運
	12	M43.7.9	土	野球	(不明)	横浜俱対米艦サツプライ選抜軍	運
	13	M43.7.10	日	野球	(不明)	天狗俱対早大第二選手	運
	14	M43.7.17	日	野球	(不明)	天狗俱対横浜サツキ俱/予定していた米艦ウイーリング対横浜俱など二試合は雨天中止	読・運
	15	M43.7.24	日	野球	(不明)	天狗俱対白金俱、横浜外人軍	読
	16	M43.7.31	日	野球	(不明)	天狗俱対慶応天狗俱、三都俱	運
	17	M43.8.28	日	野球	天狗俱	天狗俱がグリーン俱、横浜商友野球団、横浜曙俱を招き、野球試合	読
	18	M43.9.25	日	野球	日本運動俱	全国四大倶楽部野球戦/25日と翌月2日(日)の2日間開催/ 「見物人はどしどし押寄せスタンドは本より四週を取り囲んで」「見物の中で「早く始めろ」「早くやれ」などと叫んでるものがある、興行物でも見に来てる積り」 (25日)【運】	朝・運
	19	M43.11.20	日	野球	天狗俱	四大倶楽部(神戸、東京、横浜、稲門)戦(20日、23日(水・祭)、翌月4日(日)の3日間開催)/都下各倶楽部優勝戦(20日、23日(水・祭)、27日(日)の3日間開催)/ 「見物台は早くも見物を以て充たされぬ」(23日)【朝】 / 「観客は両側のスタンドから外野の方迄も翼を張った様に陣取って」 【運】	読・朝・運
	20	M44.1.5	木	野球	(不明)	成田中学と成瀬俱(成田中OB)が冬期休暇を利用し、東都の中学や倶楽部チームと対戦/5日～8日(日)	読
	21	M44.3.28	火	野球	東京運動記者俱	都下中学野球競技大会/28日～30日(木)/ 「グラウンド両側のスタンドも溢れる計り」 (29日)【運】	読・朝・運
	22	M44.4.1	土	野球	(不明)	愛知一中対慶応中	読
	23	M44.5.6	土	野球	(不明)	横浜俱対米艦アルバニー	運
	24	M44.5.13	土	野球	(不明)	横浜俱対米艦ニューオレアンズ	運
	25	M44.6.4	日	野球	(不明)	天狗俱対横浜タイガース、立教/横浜俱対米艦サラトガ	運
	26	M44.7.8	土	野球	(不明)	天狗俱対ノルド俱(学習院現選手およびOB)	読・運
	27	M44.7.23	日	野球	報知新聞	中等学校連合野球大会(横浜商業など神奈川県の中等学校も参加)/23日から3日間開催	読・報・運
	28	M44.8	?	その他	報知新聞	模型飛行機大会/開催日付不明	報
野球場・陸上競技場 併用期	29	M44.11.18	土	陸上	大日本体育協会	国際五輪大会選手予選会/18日と19日(日)の2日間開催/100m走、マラソン、跳躍競技等/初日は短中距離走の予選、二日目各競技の本競争/ 「予備予選なれば余り観客は多からざりしも競争に深き趣味を有する京浜の学生凡そ三百名許り観覧台上にて喝采」 (18日)【朝】/ 「雨降り出したるが日曜の事として見物人頗る多く」 (19日)【朝】/ 「両側のスタンドは元より、周囲は人垣で包まれ」「決勝点側の観覧席には婦人連も見ゆれば」「四周の観覧席は立錐の余地なき」 (19日)【運】	読・朝・運・冒
	30	M45.3.28	木	野球	武俠世界社・日本運動俱	中学連合大運動会/都下および神奈川県中学校参加/28日、29日、翌月1日、翌月2日(火)の4日間/野球の他に、庭球、陸上、相撲も予定されていたが、野球試合の実施しか確認できず	読・朝・武
	31	M45.4.21	日	自転車	東京輪士会	第七回春季自転車競走会	朝
	32	M45.5.24	金	野球	武俠世界社・日本運動俱	マニラ陸軍野球団対早大、稲門俱/ 一般席入場無料、設備席入場料は有料(特等70銭一等50銭二等25銭三等10銭) /羽田行電車二割引/24日(22日(水)開催予定が雨天順延)と25日、26日(日)開催	朝
	33	T1.11.3	日	野球	(不明)	六大倶野球大会/京浜電鉄が朝日新聞に広告掲載	朝広
	34	T1.11.10	日	野球・	(不明)	六大倶野球優勝大会/全国自転車大競走会/京浜電鉄が記事とは別途、広告掲載	朝・朝広
	35	T1.11.17	日	その他	武俠世界社	模型飛行機大会/ 入場無料	読・朝
	36	T2.3.27	木	野球	武俠世界社	都下中学野球庭球大会/上記番号30の大会の第二回目/27日から29日(土)の3日間/庭球大会は「早稲田の校庭」(大学か中学か不明)で実施	読・朝・武
詳細不明期	37	T5.5.7	日	自転車	(不明)	全国連合自転車大競走会/1、5、10マイルの距離別	読
	38	T6.5.5	土	自転車	東京輪士会	全国自転車競走大会/当初4月15日(日)を予定したが雨天順延となる	読・朝
	39	T12.7.8	日	自転車	(不明)	全関東自転車競走大会/「場内海水浴終日」と羽田海水浴場宣伝の一環として引用される	読広・
	40	T15.7.18	日	野球	(不明)	東京中等学校リーグ選抜軍対横浜中等学校リーグ選抜軍/「十五年ぶりに復活した羽田運動場」/京浜電鉄社長青木正太郎による始球式	朝
	41	T15.9.24	金	蹴球	東京蹴球団	第五回関東少年蹴球大会/東京朝日新聞が後援/24日(金・祭日)から26日(日)まで/「京浜羽田グラウンド」と表現	朝
	42	T15.10.2	土	蹴球	明治神宮体育会	明治神宮競技ア式蹴球東京支部予選/2、3、9、10、16、17日(いずれも土日)開催	朝

略号:「朝」…東京朝日新聞記事「朝広」…東京朝日新聞掲載京浜電鉄広告「読」…読売新聞記事「読広」…読売新聞掲載京浜電鉄広告「報」…冊子『報知七十年』の記述「運」…雑誌『運動世界』記事「べ」…雑誌『月刊ベースボール』記事「武」…雑誌『武俠世界』記事「冒」…雑誌『冒險世界』記事

注記:「倶楽部」はすべて「俱」と略号で示した/複数日におこなわれている競技の日付欄は初日を表記

表-4 羽田運動場における一般客来場時以外の法人運動会内容一覧表

時期	番号	日付	曜日	開催団体名	概算参加人数	運動会詳細と様子	出典	記事日付
野球場 主要期	1	M42.11.3	水	東京小間物化粧品組合	2,500人以上	11月3日は天長節で祝日/「東京小間物化粧品商報第五百号祝賀記念大運動会」/「羽田運動場ランニンググラウンド」で午前8時～午後5時に実施/「割引電車を利用して押掛け」/旗取り競争、「小包、珠算、玉子●り、化粧等」競争の実施/「連中が●に野天へ飛び出した事として走るのは飛躍するは」	読	M42.11.4
	2	M43.10.17	月	通信省貯金局	1,500人	10月17日は神嘗祭で祝日/午前8時開始/貯金局員男女千五百余名が参加/様子を報じる記事は確認できず	朝	M43.10.1
	3	M43.11.1	火	煙草専売局 東京第二製造所	2,400人	「職工慰安会」/午前9時10分～午後2時30分に実施/男性工員200名と女性工員2,200名が参加/「京浜電車十四台で会場に」/「会場には十数棟の天幕を張り之に万国旗を吊し」/男工による相撲、「ゴールデンバットの錫紙包装と敷島包紙の貼付」等の「遊戯」や太神楽奇術曲芸などの余興を実施	読	M43.11.2
	4	M43.11.9	水	横浜電線製造(株)	600人	図-8の運動会/横浜の会社「樓上」で午前8時30分に、前常務の銅像除幕式開催後、「直ちに」「秋季運動会」を実施/男女職工が参加/運動会の競技内容明記なし/茶番、浪花節、太神楽等の余興を実施	横	M43.11.10
	5	M44.5.14	日	通信省 通信管理局	5,000人	通信管理局及び東京市内一、二等局員連合運動会/5月7日(日)開催予定だったが、14日に雨天順延/午前9時～午前12時(午後は雨天中止)/「幾流となき各国旗を以て」会場を装飾/「男子部の配達競争」、「女子部のお手玉」等の「競争」を実施/仮装行列、茶番、狂言、相撲、剣舞等の余興を実施	朝	M44.5.14

略号:「読」…読売新聞記事「朝」…東京朝日新聞記事「横」…横浜貿易新報記事

注記:●は解説不能な文字

内の他に、1910(明治43)年時点で京浜電鉄および日運俱に在籍し、羽田運動場の経營業務にあたった人物として泉谷祐勝の存在も確認できる³⁶⁾。また、『運動世界』の記事によると、羽田運動場の借用を申し出た読者には、日運俱事

務所に申し込むか、『運動世界』編集部でも引き受ける旨の回答をしており、日運俱への取次をおこなっていた³⁷⁾。

また、表-3内の太字と下線で示したように、入場料の有無については、表-3の1番、32番、35番で記述があるが、

その他の競技については詳細が明らかでなく不明点が多い。それに加え、羽田運動場に係ることも含め日運俱の収支内容に関する資料は管見では見出だせず、32番のような設備席が有料であった場合の対応については不明である。

管理体制として不明点が多いものの、以上の記載を踏まえると、開場直後の少なくとも二年間の「野球場主要期」は、京浜電鉄と日運俱、『運動世界』発行の運動世界社の三者は緊密な関係を保ちつつ運動場の運営にあたっていた。

(5) 小括

以上各節によって、大規模総合運動場が存在しなかった明治末期から大正初期までの四年間に少なくとも36回の競技の開催が確認できた。また、当該時期に労働者層が参加する法人運動会に羽田運動場が活用され、開場後最低二年間は運動場貸出や用具貸与等の管理体制が整っていた。

すなわち、羽田運動場においては、人気スポーツ競技の観戦や法人運動会の参加などの行為を通し、大学等学校の体育会所属者やOB以外の社会層にとって運動場に関わる機会が増えていたことを確認できた。

6. 結論

3章において、羽田運動場基本構想に関わった設置者は、早稲田大学や慶應大学等の体育会OBによって構成された日運俱であった。鉄道会社による乗客誘致のための目的だけではなく、日運俱は、一般市民へのスポーツ、体育振興に関する機会提供を運動場の設置目的に掲げていた。

そして、4章では、羽田運動場にはスポーツ観戦のための観覧施設が設けられる等、一般客が多数来場できるスポーツ競技が実現する環境整備が整っていたことを確認した。

そして5章で触れた通り、羽田運動場は開場から最低でも四年間継続して、日運俱や雑誌社、新聞社等主催によるスポーツ競技が実施され、開場後二年間は法人運動会が実施された。開場から最短で二年間は京浜電鉄等による日常管理に関する運営がおこなわれていた。

京浜電鉄社史や既往研究において、沿線開発の一環としての乗客招致が羽田運動場の設置目的と従来は考えられていた。しかし、乗客招致以外の目的として日運俱が掲げた一般市民へのスポーツ、体育振興に関する機会提供目的は、4章で見た運動場整備内容と5章で見た運動場管理内容の詳細分析により、少なくとも一定程度実現に向けた努力が為されていたことが判明した。

総合運動場として羽田運動場が十全に機能していたのは開場直後の二年間に留まる。しかし、表-1で確認できるとおり、大正後期以降、芝浦球場や明治神宮外苑競技場など日運俱の理想をより体現するような総合運動場が国内各地に建設された。これら後発の運動場が直接羽田運動場を参照した資料を確認できなかったが、羽田運動場は関東地方における総合運動場の先駆事例であった。

【補注】

(1) 表-1内容は、参考文献2)3)4)と雑誌『運動世界』各号の記述を基に作成

- (2) 中澤臨川は京浜電鉄の電気課長かつ技師長である。大正3年に、押川春浪が著した雑誌記事において、中澤が羽田運動場設置の発案をし、京浜電鉄の重役を説得したと記載がある。ただし、工学の知識を活かして具体的に中澤が運動場基本構想のどの部分に携わったのかは、管見の資料では定かではない。押川春浪(1914)『酒好き運動好きの中澤君』、『中央公論』, Vol.310, pp.60-63を参照。
- (3) 運動世界編集室(1909)『編集室より』、『運動世界』, Vol.13, p.134から引用
- (4) 1万分の1地形図「穴守」1922(大正11)年測図から抜粋
- (5) 宮田憲誠(2015)『京急電鉄 明治・大正・昭和の歴史と沿線』, JTBパブリッシング p.110から原著者許可を得て一部転載。
- (6) 図-3内で「野球場」と矢印で示した部分を中心に拡大したもの
- (7) 運動世界編集室(1909)『日本運動倶楽部羽田大田野球場』、『運動世界』, Vol.15, 口絵写真版(頁数なし)から一部抜粋
- (8) 図-3内で「テニスコート」と矢印で示した部分を拡大したもの
- (9) 運動世界編集室(1911)『羽田の国際競技予選会』、『運動世界』, Vol.43, 口絵写真版(頁数なし)から一部抜粋
- (10) 藤井写真館(1910)『明治四三年十一月横浜電線株式会社 秋季運動会記念絵葉書』(横浜開港資料館所蔵)を筆者にて一部抜粋

【参考文献】

- 1) 有山輝雄(1996)『全国優勝野球大会の形成と新聞』, 津金澤聰廣『近代日本のメディア・イベント』, 同文館出版, pp.61-88
- 2) 岸野雄三(1999)『近代体育スポーツ年表』, 大修館書店, pp.97-99
- 3) 正木喜勝(2016)『豊中グラウンドの誕生とその意義』, 『阪急文化年報』, Vol.4, pp.23-36
- 4) 坂井康広(2004)『戦前期における電鉄会社系野球場と野球界の変容』, 『スポーツ社会学研究』, Vol.12, pp.71-80, 109
- 5) 西原茂樹(2004)『東京・大阪両都市の新聞社による野球(スポーツ)イベントの展開過程』, 『立命館産業社会論集』, Vol.40-3, pp.115-134
- 6) 京浜急行電鉄(株) 杉本寛一編(1949), 『京浜電気鉄道沿革史』
- 7) 京浜急行電鉄(株) 社史編集班編(1980), 『京浜急行八十年史』
- 8) 早稲田大学図書館編(2002), 『『冒険世界』総目次』, 雄松堂出版, pp. i - iii
- 9) 好球生(1908)『野球風聞記』, 『冒険世界』, Vol.1-1, pp.105-108
- 10) 運動世界編集室(1908)『其他の運動界』, 『運動世界』, Vol.1, p.イの17
- 11) 同上(1909)『其他の運動界』, 『運動世界』, Vol.11, pp.124-125
- 12) 1908年12月27日付及び12月30日付東京朝日新聞記事
- 13) 押川春浪(1909)『日本大運動競技場設立に就て』, 『冒険世界』, Vol.2-2, pp.84-85
- 14) 運動世界編集室(1909)『日本運動倶楽部成る』, 『運動世界』, Vol.15, pp.139-142
- 15) 同上(1909)『編集室より』, 『運動世界』, Vol.18, pp.63-64
- 16) 同上(1909)『羽田の大運動場』, 『運動世界』, Vol.13, p.104
- 17) 水谷竹紫(1910)『羽田運動場の将来』, 『運動世界』, Vol.24, p.25
- 18) 運動世界編集室(1910)『編集室より』, 『運動世界』, Vol.28, p.85
- 19) 同上(1911)『野球春秋』, 『運動世界』, Vol.35, p.45
- 20) 大日本体育協会編(1936)『大日本体育協会史 上巻』, 第一書房, p.169
- 21) 大森兵藏(1911)『国際競技選手練習法』, 『運動世界』, Vol.42, p.55, 1911
- 22) 橋戸碩鉄(1911)『羽田予選会雑感』, 『運動世界』, Vol.43, pp.44-46
- 23) 柏木村人(1911)『国際競技予選会記』, 『運動世界』, Vol.43, pp.91-96
- 24) 運動世界編集室(1911)『羽田の国際競技予選会』, 『運動世界』, Vol.43, 冒頭写真頁
- 25) 弓館小鯉(1911)『天狗倶楽部史』, 『運動世界』, Vol.34, pp.42-50
- 26) 横田順藏(1993)『天狗倶楽部怪傑伝』, 朝日ソノラマ
- 27) 牧田南音子(1909)『球界一夕話』, 『運動世界』, Vol.15, pp.40-46
- 28) 押川春浪(1911)『運動界の鼠輩を誅せよ』, 『冒険世界』, Vol.4-12, pp.112-116
- 29) 1911年7月28日付東京朝日新聞記事
- 30) 1914年11月23日付読売新聞記事
- 31) 1919年4月20日付東京朝日新聞記事(中澤の五年前の経歴に関する記事)
- 32) 馬場信行(2017)『明治後期から昭和初期の京浜電気鉄道による羽田穴守海水浴場施設の運営実態及び集客戦略の研究』, 『都市計画論文集』, Vol.52-3, pp.357-364
- 33) 1926年7月19日付東京朝日新聞記事
- 34) 運動世界編集室(1909)『編集室より』, 『運動世界』, Vol.19, p.63
- 35) 同上(1910)『弥次倶楽部』, 『運動世界』, Vol.20, p.63
- 36) 冒険記者(1911)『全国学生大競走会実記』, 『冒険世界』, Vol.3-12, pp.1-8
- 37) 運動世界編集室(1910)『弥次倶楽部』, 『運動世界』, Vol.22, p.51